

松本市中心市街地における都市施設の分布と街路ネットワーク との関係に関する研究

令和2年2月 二木 緋奈子

要旨

目的

近年、都市計画で研究されている中心性という概念は、都市構造の特徴を把握する上で有用で、都市の今後の維持・発展に役立つと考えられている。本研究では、松本市中心市街地を対象に街路ネットワークの中心性指標を導き出し、その特徴を検討した。また、都市施設の分布傾向を調べた。そして、街路の中心性と施設の立地の関係性の観点から松本市中心市街地の現状を分析し、今後のまちづくりへの有効な一助にすることを目的とした。

方法

基盤地図情報を用いて街路ネットワークデータ及び都市施設のポリゴンデータを作成し、GIS及び現地調査により都市施設に属性を与えた。まず、カーネル密度推定法、平均最近隣距離法、標準偏差楕円を用いて、都市施設の空間分布パターンを求めた。次に、Urban Network Analysisを用いて、Betweenness, Closeness, Straightnessの3つの中心性指標を求めた。そして、街路の中心性指標と都市施設の分布との相関を調べた。

結論

街路の中心性指標と都市施設の分布との相関では、都市施設の大分類を比較すると、商業施設はBetweennessとの相関が強いことが分かり、利用者にとって歩きやすいまちなかの形成に繋がっていると言える。また宗教施設は街路中心性との相関が強く、歩行移動可能な範囲で発展してきたことが分かった。また、特に街路の中心性との相関が弱い宿泊施設では、その立地と街路の中心性を併せて検討することは、観光が盛んな松本市において観光客の滞在時間の増加が期待でき、歩行を考えたまちづくりに繋がると言える。ここで示した手法はまちづくりを検討する上での科学的アプローチになり得ると考えられる。

指導教員 藤居 良夫 准教授